

短 報

ソラチコザクラの白花品（中井秀樹・大橋広好）

Hideki NAKAI and Hiroyoshi OHASHI: A White Flowered Form of *Primula sorachiana* Miyabe & Tatewaki from Hokkaido

ソラチコザクラ (*Primula sorachiana* Miyabe & Tatewaki) は北海道固有種であり、空知支庁金山で発見された標本に基づいて記載された。しかし、今日この産地はダム建設によって失われてしまった。現在知られている主な分布域は空知南部から日高地方であり、自然の湿った岩壁ばかりではなく、人工的に削られた崖にもその生育を見ることがある。日高支庁浦河町の東部を流れる日高幌別川水系で開削された林道にも人工的な崖が所々にあり、大小のソラチコザクラの群落が見られた。大きな群落では花冠が濃紅紫色から淡紅紫色あるいは淡青紫色まで変異するのが観察できたが、その中に、非常に数少ないが、純白のものが混生していた。乾燥標本では花冠裂片はやや紫色を帯びたが、花冠筒部は白色

のままであった。白花品種として記録し、タイプは東北大学大学院理学研究科植物標本館におく。

Primula sorachiana Miyabe & Tatewaki in Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. **13** (1): 2 (1933).

f. **candida** H. Nakai & H. Ohashi, f. nov.

Corolla candido, cetera ut in typo.

Nom. jap.: Yukihiro-sorachi-kozakura. ユキイロソラチコザクラ

Typus: Hokkaido. Hidaka subprefect., Urakawa-cho, in scopulis humidis artificialibus. H. Nakai, 24 May 1996 (TUS).

(Biological Institute, Graduate School of Science,

Tohoku University

東北大学大学院理学研究科生物学教室)

チョウセンキバナアツモリソウ、日本新産植物（井上 健）

Ken INOUE: *Cypripedium guttatum* Sw. (Orchidaceae), New to Japan

キバナノアツモリソウはチョウセンキバナノアツモリソウ *Cypripedium guttatum* Sw. の変種とされたり、これに近縁な独立種 *Cypripedium yatabeanum* Makino とされ、日本では長野県・山梨県の中部地方と北海道に生育し、国外では千島列島・カムチャッカ・アリューシャン列島・アラスカとベーリング海

の周辺に分布している。その花は和名の通り緑黄色で濃い茶褐色の斑紋がある。チョウセンキバナノアツモリソウ *C. guttatum* はヨーロッパから東シベリア・中国東北部・朝鮮半島までのユーラシア大陸の亜寒帯の広い地域と樺太・アラスカから報告されているが、日本からの報告はなかった。*C. guttatum* の花色は

Table 1. チョウセンキバナノアツモリソウとキバナノアツモリソウの相違点

	チョウセンキバナノアツモリソウ	キバナノアツモリソウ
花色	白地に紅紫色の斑紋	緑黄色に濃茶褐色の斑紋
唇弁	長さ 14–21(–25) mm 柄が短く、長さ 4–5mm	長さ 19–28 mm 柄が長く、長さ 6–11mm
花弁	先端にゆくにつれ次第に細くなり 先端部は膨らまない	先端にゆくにつれ急激に細くなり 先端部は膨らむ
葉の付き方	2個の葉は 17–20mm ほど離れて付く	2個の葉は接近し、通常 3–7mm ほど離れて付く

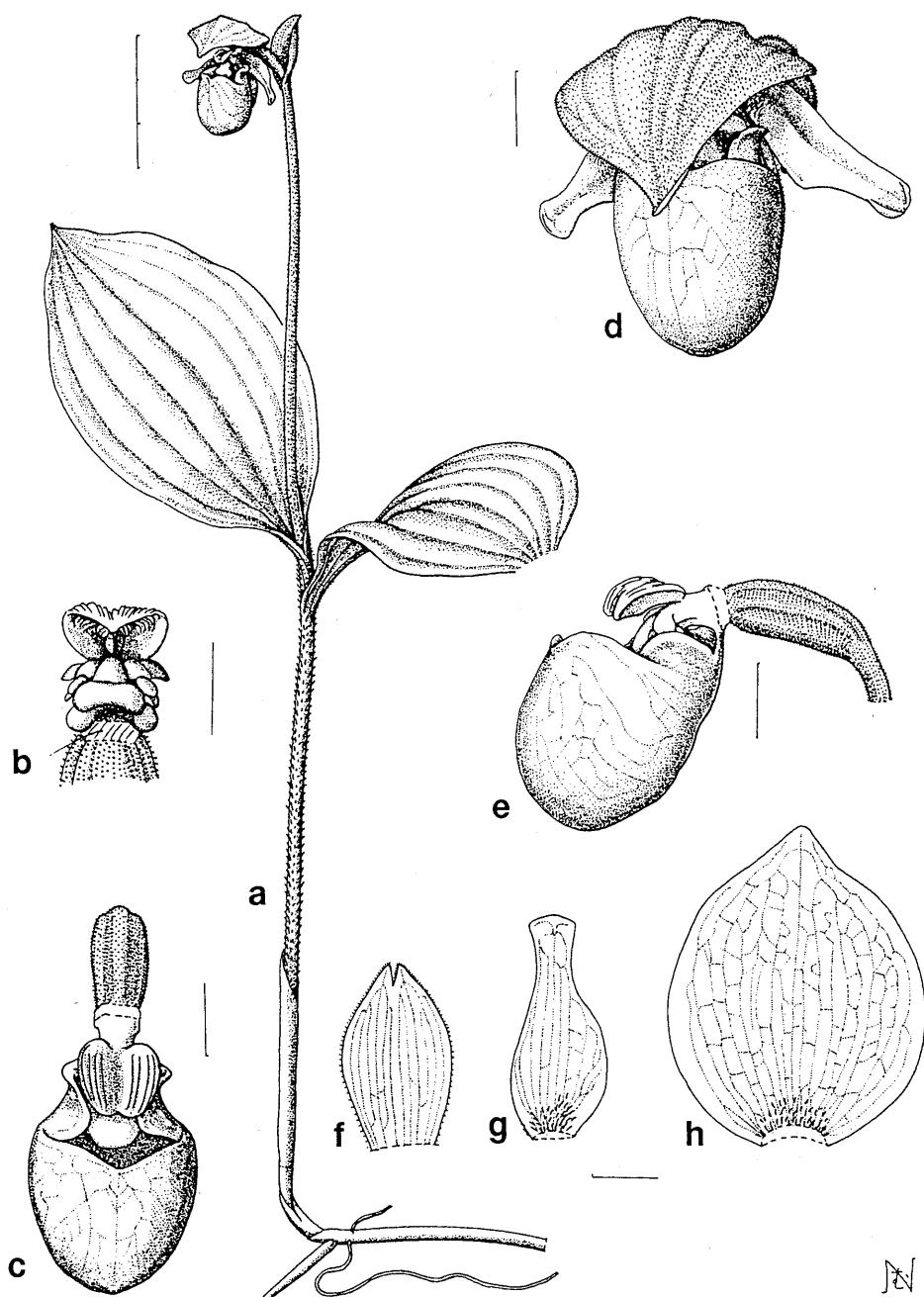


Fig. 1. チョウセンキバナノアツモリソウ *Cypripedium guttatum* Sw. a, plant; b, front view of column; c, front view of lip and column; d, flower; e, side view of lip and column; f, united lateral sepals; g, petal; h, dorsal sepal. Scale: a, 3 cm; b-h, 5 mm. (a, from dried specimen; b-h, from cultivated plant). Drawn by Mutsuko Nakajima.

白地に紅紫色の斑紋があり、容易にキバナノアツモリソウから区別できる。最近、いくつかの情報により、この白地に紅紫色の花色を持つアツモリソウ属植物が秋田県に自生することが判明した。秋田県でこの植物を見出した藤原陸夫氏から乾燥標本を、生植物を栽培している三橋俊治氏より花の液浸標本を譲り受け、東大総合研究博物館に所蔵されている *C. guttatum* の標本と比較・検討した。

その結果、秋田産の植物は *C. guttatum* と区別点が見当たらず、*C. guttatum* とするのが妥当という結論になった。キバナノアツモリソウは日本では従来チョウセンキバナノアツモリソウの変種とする見解が多いが、両者を比較検討すると Table 1 に示すように、色々な点で異なるので、旧ソ連邦の Nevski などの別個の種として取り扱う見解が適当であると思われる。中島睦子氏の描いた図 (Fig. 1)

と三橋氏の撮影したチョウセンキバナノアツモリソウの写真を載せる (Fig. 2)。

地元の人の話では、チョウセンキバナノアツモリソウは以前は 1000 個体以上自生していたというが、現在では自然遷移と盗掘により 40 個体程度にまで減少しているという。この植物は男鹿国定公園内に生育し、キバナノアツモリソウとしてその他の植物と同様にある程度の保護の対象にはなっている。しかしながら、今回報告したように秋田県の植物はキバナノアツモリソウとは異なる植物であり、日本では 1 ケ所しか自生地がなく、個体数も減少し、絶滅の危機に瀕する植物であり、保護の優先度は高いと考えられる。今回報告することにより絶滅に拍車をかけることも懸念されたが、発表を遅らせこのまま絶滅するのを座視できないので、報告することにした。環境庁・秋田県などの行政機関に迅速な保護



Fig. 2. チョウセンキバナノアツモリソウ *Cypripedium guttatum* Sw.
三橋俊治氏の栽培個体、氏自身の撮影による。

対策の設定を要望したい。最後に資料の提供や描画などに協力頂いた藤原陸夫・三橋俊治・中島睦子・大場秀章の諸氏に深謝したい。

Cypripedium guttatum Sw. in Acta Acad. Holm. 251 (1800); Komarov, Fl. Mansh. 1: 508 (1901); Schlr. in Fedde Repert. Beih. 4: 81 (1919); Nevski in Fl. USSR 4: 596 (1935); Luer, Nat. Orch. U. S. & Canada 66 (1975).

Compared with *Cypripedium yatabeanum*, two leaves somewhat distantly disposed at the stem, 17-20 mm apart; the lip shorter, 14-

21-(25) mm long; stalk of lip shorter, 4-5 mm long; petals not expanded at apex; flower color white with dark purplish pink spots.

Hab. Akita Pref., Oga Peninsula (R. Mochizuki 1735, SHIN 179986). Newly found in Japan.

Distr. Europe, W. & E. Siberia, Sachalin, N. E. China, N. Korea, Alaska, Canada.

(Faculty of Science, Shinshu University
信州大学理学部)

ニュース

英語教科書に載った西岡京治氏（金井弘夫） Hiroo KANAI: Mr. Kyoji Nishioka in Schoolbook

1964年以来30年近くにわたって、農業をはじめとするブータンの発展に取り組んだ西岡京治氏が、かの地で客死されたのは1992年だった。西岡氏の地道な努力は、海外協力事業のあるべき姿として評価され、ブータン政府はその功績に対して1980年「ダショ」の称号を贈り、同氏の死に際しては国葬をもって報いたという。平成8年度高校英語の教科書（増進堂 New Stream II）に、Lesson 1として西岡氏のことが4頁にわたって紹介されている。生徒諸君がこれを機会に、同氏の仕事や海外援助の本質について、なにがしかの

感銘を与えられることと期待される。これについて森和男氏の個人誌 *Flora Asiatica* 164号(1996)で知った。ついでだが、森氏によると教科書の写真が裏焼きで、ブータン服の打合せが逆になっているという。たしかに、男性の写っている三枚の写真のうち、一枚は左前（これが正しい）、西岡氏は二枚とも右前である。これは民俗資料としてはまずい。植物の図や写真でも、デザインの都合で裏焼きにされることがあるが、対称性の研究などの際、眞実を見誤らせるおそれがある。注意すべきことである。

ミズバショウの果実の味（金井弘夫） Hiroo KANAI: Taste of the Fruits of *Lysichiton camtschatcense* (Araceae)

1996年10月、尾瀬ヶ原総合学術調査の際、熊が食い散らしたミズバショウの熟果があつたので口にしてみた。意外なことにテンナンショウのような苛烈味ではなく、無味無臭で粉質の舌ざわりだった。ついでに放り出されていた果序の柄も味わったが、これもただ水っ

ぽくてわずかにあお臭さがあるだけだった。尾瀬では秋になるとミズバショウの果実が熊に食い荒らされていて、整腸といったなにか薬用的な採食となんなく考えていたが、普通の食餌なのかもしれない。